

愛知県地域再生 まちづくり研究会

愛知県における長生きを喜べるまちづくりとは何か



公益財団法人
杉浦記念財団



はじめに

杉浦 昭子

公益財団法人杉浦記念財団
理事長

私ども夫婦は、1976年12月、医薬品・健康食品・化粧品・日用品の販売、及び処方せん調剤を目的に掲げる薬局を愛知県西尾市に開設して以来、「地域のかかりつけ薬局」としてスギ薬局を育てて参りました。

皆様の多大なるご支援を賜り、たくさんのお客様・患者様にご利用いただける企業に成長させていただきました。

スギ薬局グループが創業35周年を迎えた2011年9月1日に、それまでの支援に、社会貢献という形で少しでもお応えしたいとの思いから、杉浦広一・杉浦昭子を設立人として一般財団法人杉浦地域医療振興財団を設立いたしました。そして2015年7月1日に公益認定を受け、名称を「公益財団法人杉浦記念財団」に改めました。

2015年には、国立長寿医療研究センターの総長であられました大島伸一先生に相談して、特長を活かして地域を再生し、自律的で持続的な社会をつくることが必要と考え、「愛知県地域再生・まちづくり研究会」を立ち上げ活動を継続してまいりました。

私自身が、毎回参加して、若い世代にどのように引き継ぎ、幸せを維持しながら乗り越えていくのかが大切だと思っています。これからも本誌をご覧の皆さんと一緒に考えていきたいと願っています。

皆さまにおかれましても、自分ごととして考える機会にしていただければ幸いです。

愛知県地域再生 まちづくり研究会

次世代チーム活動報告 2018 - 2024
愛知県における
長生きを喜べるまちづくりとは何か

愛知県地域再生・まちづくり研究会 次世代チームメンバー

座長	大島 伸一	国立研究開発法人國立長寿医療研究センター 名誉総長／日本福祉大学 常務理事
メンバー	青山 幸一	愛知県豊根村 農林土木課長
	日渡 健介	一般社団法人未来医療研究機構
	長谷川 友紀	コミュニティ・ユース・バンク momo 副代表理事
	岩岡 ひとみ	NPO法人全国福祉理美容師養成協会 (NPOふくりび) 事務局長
	都築 晃	藤田医科大学 地域包括ケアセンター／医学博士、理学療法士
	西岡 麻知子	南医療生活協同組合 常勤理事／南生協病院 医局事務局長
	三矢 勝司	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事業推進マネージャー
	若杉 玲子	愛知県長久手市 市長公室次長 兼 秘書課長
アドバイザー	長谷川 敏彦	一般社団法人未来医療研究機構 代表理事
	大貫 徹	国際ファッショントレーニング専門学校 教授／名古屋工業大学 名誉教授
	後 房雄	愛知大学 地域政策学部 教授／名古屋大学 名誉教授
オブザーバー	大森 雅弥	中日新聞 編集局 編集委員
	森 貞述	特定非営利活動法人 地域ケア政策ネットワーク 理事 (元愛知県高浜市長)
	安井 俊夫	愛知総合看護福祉専門学校 もりのがくえん 校長 (元愛知県教育長)
	山本 保	元参議院議員・総務大臣政務官／元厚生省児童福祉専門官
	石田 芳弘	至学館大学 コミュニケーション研究所 所長 (元愛知県犬山市長)
	北川 薫	梅村学園 学事顧問／梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議議長 (前中京大学 学長)

※2018年発足時／役職は当時

C O N T E N T S

[総括]

自分たちの向かう社会をどうすればよいか

座長：大島伸一

[座談会]

その先の未来を信じ、議論を尽くし行動しよう

座長：大島伸一、キャプテン：青山幸一、副キャプテン：西岡麻知子、主宰：杉浦昭子

14 愛知県地域再生・まちづくり研究会 2023年度 研究活動概要

22 研究活動に参加して～次世代チームメンバーから～

24 研究活動アドバイザー／オブザーバーから

25 資料／研究会開催実績一覧、刊行物・シンポジウムポスター

自分たちの向かう社会を どうすればよいか

「現役」から「若手」へ、世代をつなないだ議論と意識の変化

[座長]



大島 伸一

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター
名誉総長

「議論はできるが 確かめることはできない」

「愛知県地域再生・まちづくり研究会」の活動を冊子とするため、この原稿に向かっているが、決して忘れてはならないことがある。記録にきちんと残しておかなければならぬことがある。

第一に、現役世代を中心とした「愛知県地域再生・まちづくり研究会・次世代チーム」は2015年に発足した「愛知県地域再生・まちづくり研究会」の議論の中から出てきたものである。このことについては、以前にも記載した憶えがあり繰り返しになることをお許し願いたい。「愛知県地域再生・まちづくり研究会」は、杉浦記念財団が愛知県に存在しており、地元を中心に超高齢社会がどうなるか検討する会を持ちたいということが設立の動機である。

メンバーは別表のとおり、皆さん70歳を超え、現役の頃は社会の第一線で指導的役割を果たしてこられた方たちである。会の目的は、日本の高齢社会はこのままゆくとどうなるか、会は毎月1回午後から議論、講演、講演後の会食まで4時間を費やしていた。日本の社会の現状、将来像から始まり、全国の地域再生・まちづくりの成功例についてなど、識者の講演を聴き討議し、日本はそして愛知県はこれからどうあるべきか、愛知県を中心としてその処方せんを

作成し、この地域に適用できる「これからのまちづくり」を考えてきた。毎回出席率は良く、会議の中での議論、その後の食事を取りながらの懇親会と話は毎回盛り上がった。

発足して2年を過ぎた頃だったか、誰からともなく、いろいろと議論してきたが相当厳しい社会になることはよく理解できた。対応策をどう考えてゆくか簡単ではないが、それほど難しいことだとも思えない。しかし、問題はその頃には我々はいないことである。

「これまでの経験と知恵を注いで議論し、見通しの付く限りの社会像を考えてきたが、我々の考えたことがどのように社会に活かされてゆくのか、我々が考えてきたことは間違っていないのかどうか、それを確かめることはできないですね」。沈んだ空気が広がった時、「超高齢化がピークに向かう時、あるいはその姿が見えてくる過程で当事者になるような若手を集めて、彼ら自身が自分たちが向かう社会をどうすればよいのか考える会をつくったらどうか」と誰かが言った。それはいいと、この提案が現実のものとなった。若手のメンバーが集まったのが2017年6月、彼らが中心となって会議を進めるようになったのは、2018年6月からである。

最初のメンバーの中で最も積極的に発言をされていた大沢勝氏は2023年5月に91歳、安井俊夫氏は

2025年1月に87歳で亡くなられた。文字通り次の世代に志を託されて逝かれたのである。私は研究会の有識者メンバーと若手のメンバーとがお互いの役割を知りながら、その役割を世代間でつないでゆくという会議に直接参加し、國のため國民のため、公益のため公共のために知恵を絞り世代間で継承してゆくというのはこういうことだと深く感動している。

「長生きを喜べる社会」を熟考しつくった未完の提言

第二に記しておきたいことは、参加してくれた若手のメンバーの意識の変化である。彼らがどう変わっていたか。彼らの記した報告を読めば歴然としている。人口が高齢化し人口構造が変化して超高齢社会に向かう、65歳以上人口が30%を超えるような社会がどうなるのか。加えてデジタル化、そしてAI化が急速に進化してゆく社会変化にどう対応してゆくのか。かつて経験したことのないまったく未知の技術に動かされる複雑な社会の中で、より望ましい生活とはどのようなものか、解答を求められている。無論、正解はどこにもない。だが問題は解る、問題の構造も解る、個人の問題か社会の問題かの区別もできる。ではどうするのだ。資料を集め現状を分析し、専門家の話も聞いた。議論を尽くし考えに考えた。正解はわからないが、未熟であることを承



会議の様子

知で解答をつくった。努力をしたからしょうがないとか、勘弁してくれと言っているのではない。努力をし続ける者が考えるその先にある未来が、「生きていてよかったという社会」により近いものであると信じ、提案をつくりあげたのである。

私はこのような会にまとめ役として参加し、一定の成果をあげられたことに満足し、それだけでなく私たちの行ってきた事業を自賛している。同時にこのような機会を持つことができたのは、意欲的に議論に参加してくれた委員の皆さん、そして会の趣旨に賛同し全面的に支援を続けてくれた事務局の杉浦記念財団のおかげである。とりわけ理事長の杉浦昭子氏が、一度も休むことなく皆出席であったことは特筆しておくべきことであろう。

■「愛知県地域再生・まちづくり研究会」委員名簿

座長	大島 伸一	国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 名誉総長
	石田 芳弘	至学館大学 伊達コミュニケーション研究所 所長、元愛知県犬山市長、元衆議院議員
	伊藤 文郎	社会保険診療報酬支払基金 理事長、前国民健康保険中央会 常務幹事、元愛知県津島市長
	大沢 勝	社会福祉法人愛知県社会福祉協議会 会長、学校法人日本福祉大学 名誉総長
	亀井 春枝	居宅介護支援事業所有限会社はじめの一歩 代表、元愛知県薬剤師会 会長
	北川 薫	学校法人 梅村学園 学事顧問、元中京大学 学長
	森 貞述	特定非営利活動法人 地域ケア政策ネットワーク 理事、元愛知県高浜市長
	安井 俊夫	愛知総合看護福祉専門学校もりのがくえん 校長、元愛知県教育長
	山本 保	愛知県政策顧問、改革の風フォーラム 代表、元参議院議員、元総務大臣政務官
アドバイザー	長谷川 敏彦	一般社団法人未来医療研究機構 代表理事

※2015年発足時／役職は当時

その先の未来を信じ、議論を尽くし行動しよう

超高齢化・単身化・DX、急進する社会変革に 医療・介護はどう向き合うか

次世代チームが動き出した2018年以来、研究会は3回のシンポジウムを開催し、定例会議を継続してきました。その間、コロナ禍を経て大きく変貌した社会を背景に、医療・介護のあり方、そしてメンバーの認識や取り組みにも変化が生じています。その総括を兼ねて、これまでの活動を振り返りました。

社会変化と研究会を通して 生まれた気づき

大島 「長生きを喜べるまちづくり研究会」次世代メンバーで議論を始めて6年になります。当時は、人口動態の変化が語られてはいましたが、社会全体にはまだ実感が乏しく、現場の変化も目に見える形ではありませんでした。しかし、それが今では様々なところで高齢化による問題が噴き出しており、認知症も大きな社会課題となっています。フレイルや認知症などの高齢化関連の話題も日常的に報道されるようになり、多くの人がその変化を実感し始めています。当時はまだそれほど意識されていなかったAIや社会のデジタル化についても、急速な進展を経て大きな注目を集めています。こうした急速な変化を受けて、諸課題の重要性も認識され、社会は大きな転換期を迎えていました。

青山 未来を考えるに当たり、議論では、「高齢化」「AIなどデジタル技術の進展」「単身世帯の増加」「寿命の延伸」という4つの軸を設定しました。「働き方」では、労働のAIへの代替や、貧富格差拡大への強い懸念、終身雇用からパラレルキャリアへの移行、若いうちか

ら多様な経験を積む、新しいキャリア形成のあり方などについて議論を重ねました。「暮らし方」については、単身社会における新しいつながり方や、技術の進化と相まってロボットとの共生の可能性も論点となりました。

「長生きを喜べる社会の実現」に向けては、定年後の長い時間の使い方、テクノロジーの活用、仕事やお金、新しい人とのつながりを再構築する必要性などについて議論してきました。6年前、気づけなかったことに気づき、未来を「自分ごと化」できたこと、その姿勢が次の一步になるという議論を重ねてきました。

大島 ご自身との関わりについてはいかがですか。

青山 私は愛知県の豊根村で暮らしており、高齢化や少子化を日常の中で肌で感じていますが、日本全体が高齢化した時の未来、2060年といった長期的な視点で考える機会は多くありませんでした。

研究会での議論を通じて、2点を意識するようになりました。一つは、このままのやり方で暮らしを続けていくと、“長生きを喜べない未来”が来るのではないかという点。高齢化の急進によって、若い世代が高齢者を支える従来の社会構造が変わるということです。もう



[出席者]

研究会座長：大島伸一 国立長寿医療研究センター 名誉総長
キャプテン：青山幸一 愛知県豊根村 住民課長（旧：地域振興課長）
副キャプテン：西岡麻知子 南医療生活協同組合 常勤理事
主宰：杉浦昭子 杉浦記念財団 理事長

一つは、AI、デジタル技術の進展（DX）です。人が技術を使う時代から、人の営みが技術に規定される時代への転換を実感しました。さらに、単身世帯が4割になるという未来予測は衝撃的で、家族を前提とした社会のあり方が標準ではなくなる可能性を強く感じました。こうした変化の中で、認知症の人が街にあふれたら社会はどうなるのか、社会的負担をどう分担するのかなど、大きな不安をメンバー間で共有することができました。

西岡 私の業務は、まさに「高齢者・単身社会をどう生きていくか」というテーマと一致していて、とても学びが多かったです。我々の業界では、いずれ高齢・単身・認知症を抱える方々であふれるだろうという未来が早い段階から見えており、病院としてもその準備をしなければならないと考えていました。

当時、それを職員に話しても、「ここは急性期病院ですから関係ありません」という反応が圧倒的でした。しかし、この6年の間に状況は大きく変わり、入院患者のほとんどが80代以上となり、家族が介護を担わない、あるいはそもそもご家族が来院しないケースも増えました。コロナの影響もありましたが、現場でそれを目の当たりにする中で職員の意識は大きく変化しました。いよいよ病院は、80歳

以上の認知症症状のある単身世帯の方々であふれる。だからこそ準備を進めておいて本当によかったと実感しています。研究会での学びは現場で活かされています。

DXの面では、現場ではすでにAIがカルテのサマリー作成を担うようになり、これまで1時間かけていたことが、わずか数秒で終わります。ただ現場は非常に楽になった一方で、「考える力が弱まらないか」という怖さもあるのは否定できません。

都市と地方、 医療・介護現場の今

大島 高齢化が進むことの意味は、誰もが漠然と理解していたと思います。例えば、認知症やフレイルの方がこのまま増えたら一体どうなるのか。また都市部では孤独死が圧倒的に多く、一方で、過疎化が進む地方では老々・独居は増え続けているが、孤独死はそれほどでもない。恐らくそれは田舎特有のつながりがあるからでしょう。こうした具体的な問題を考えると、何が問題なのか解決すべきポイントが見えてきます。

青山 今回、多様なメンバーが集まることで、自分が見えている世界には限界があり、

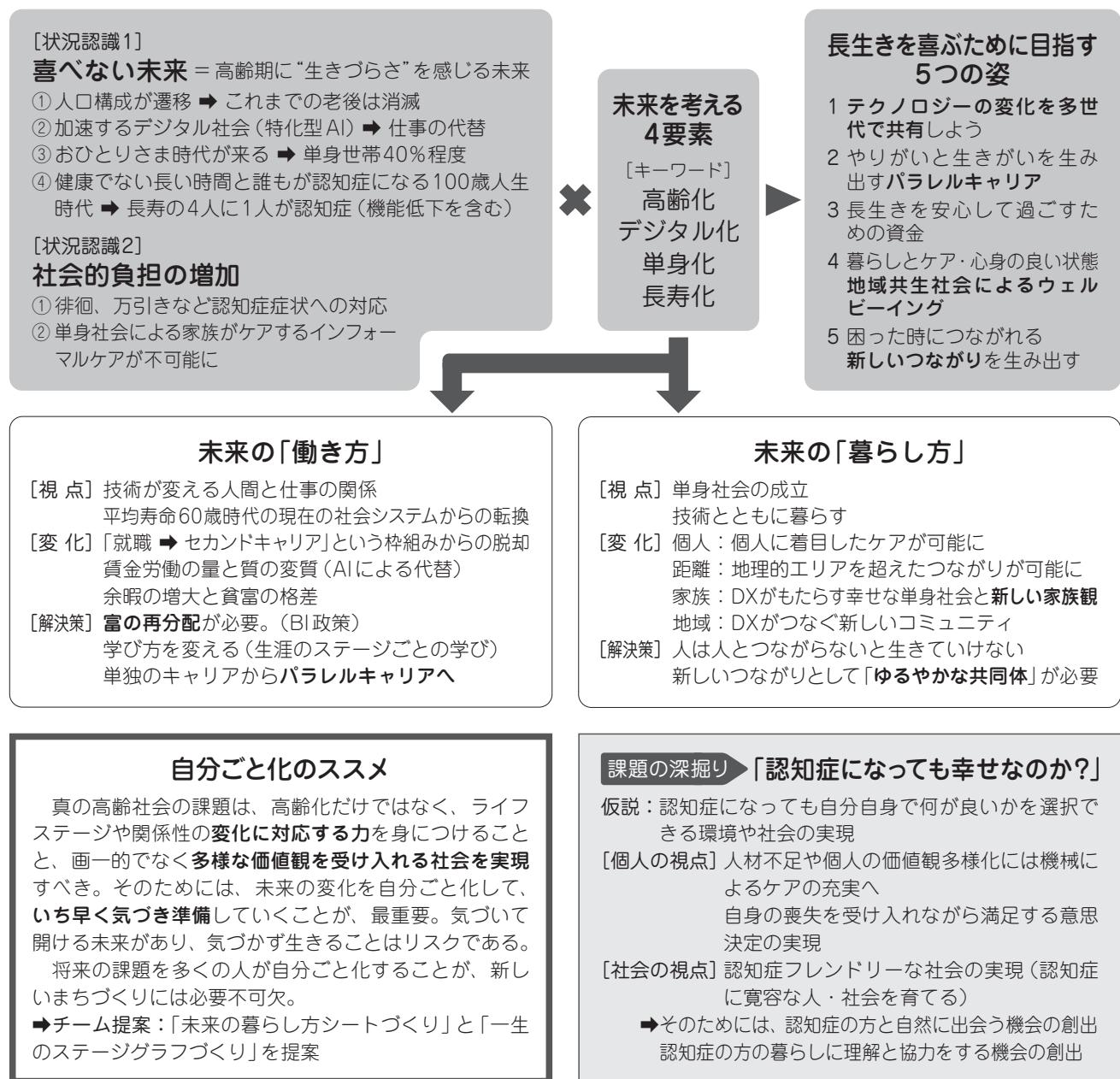
見えない世界を知ることが次の一步につながる重要な要素だということを実感しました。高齢化や認知症の現実についても理解が浅かったです。AIが欲しい情報だけを答えてくれる時代だからこそ、現場を自分の目で確かめ、感じることが大切だと感じています。

孤独死の問題については、豊根村では都市部ほど多くないのですが、「家族は介護を引き受けない」というケースが増えています。若い世代の都市への流出も背景にあり、家族がいても支えが届かない、そういう時代なのだと肌で感じます。

受けない」というケースが増えています。若い世代の都市への流出も背景にあり、家族がいても支えが届かない、そういう時代なのだと肌で感じます。

西岡 そういうケースは病院でも目立っています。家族は「介護サービスに任せます」と関与を最小限にし、ご本人も「迷惑をかけたくない

■『長生きを喜べるまちづくりとは何か?』次世代チームにおける討議の概要



いから家族への連絡は不要、ケアマネジャーの対応でよい」というケースが増加しています。

介護保険制度も20年以上を経て、支援体制はかなり成熟しており、ご家族がいなくても生活できるケースは多く、幸福感は別として暮らしていくことはさほどの支障もなく成り立ちます。ある程度、経済的に余裕がある層には、「家族に迷惑をかけず、施設で上質に暮らす」という価値観が広がっています。今は様々なタイプの介護施設ができておらず、例えば、年金の範囲内で利用可能な施設やがん患者に特化した施設など、ターゲットを絞って運営している所も増えています。市場の棲み分けが進んでいます。

大島 一方で介護施設の閉鎖が、一時期に比べると増えています。医療・介護領域外からの参入に経営感覚の未熟さも影響し、経営が悪化すると簡単に廃業となってしまう所も少なくないようです。

西岡 閉鎖された施設の半分は、準備して参入したもの、収益が伸びず撤退するケース。もう半分は、ケア重視で実直に取り組んできた施設が、限界に達して閉鎖せざるを得ないケースです。こうした特殊な構造も露呈しています。

大島 制度のあり方とビジネスの持続性をどう両立させるか。介護は、死や生活のあり方に直結する分野ですので深刻です。解はどこにあるのでしょうか。

変わる人々の意識と 医療のかたち

西岡 個人の意識変化も大きいです。以前の救急は、「診てほしい」「入院させてほしい」というのが強いニーズでしたが、最近は高齢



者が入院を望まず、「点滴だけで帰る」ケースが増えています。検索サイトやAIで病名を調べて自己診断し、薬も指定し、「必要最小限で」と強調するなど、医療消費を抑制する動きが進んでいます。医療に対する一般市民のニーズが大きく変化してきたと強く感じます。こちらに何も求められていないのではないか、と思うほどです。

理事長 インターネットで全部情報を集めてしまう。そしてそれが個人の考え方・行動にも大きな影響を及ぼしていると。

西岡 はい。検査の提案をしても費用負担の懸念からか、受け入れに否定的な反応が増え、また「長生きしたい」という延命への志向も弱まっているようにも感じます。例えば、栄養分の点滴さえ希望しない方が増え、「補液のみで自然に」という選択もままあります。一方で医療側の意識改革が追いついていない面があり、「何も望まないなら、なぜ受診するのだろうか」といった戸惑いが現場で生じる場面も見られます。

大島 超高齢化が進んでいるのは明らかですが、高齢になるほど病気を見つけて徹底的に治すという、これまでの病に対する考え方から、老いが進んで死を迎えるという感覚を当たり前のこととして受け入れる社会への転換が徐々に進んでいる、という風にも理解できると思います。

座談会 次世代チーム活動を振り返って

「老いと死を当たり前に受け入れる社会に
転換が進んでいる」



[研究会座長]

大島 伸一
国立長寿医療研究センター
名誉総長

「高齢者であふれる病院
研究会の学びを現場に活かして」



[副キャプテン]

西岡麻知子
南医療生活協同組合
常勤理事

「治す」から「治し支える」へ

大島 私は、政府が設置した社会保障制度改革国民会議に参加していましたが、そこで医療の考え方方が大きく変わりました。それまでの徹底的に「治す医療」から「治し支える医療」へと政策的に転換がはかられ、医療と介護を連携して支える仕組みが、法制度として位置づけられました。社会も老齢化が急速に進む中で、人は老い、そして死ぬという宿命を少しずつ受容する方向に動いていると思います。

青山 豊根村ではすでに、医療機関と介護事業所が同一建物内にあり、連携しています。具体的には、介護職と医療職が同じシステムで情報共有する仕組みで、最終的には、看取りまで含めたトータルケアを目指しています。人口約1000人の小さな地域だからこそできる部分はありますが、都市部でも少しずつ同様の動きが広がっていると感じます。

大島 地域全体で、そのような取り組みを広げていくことは、田舎、過疎地である豊根村では比較的やりやすく、このような時代の大きな方向性を考えると動きやすいと思います。一方、西岡さんのように病院という立場ではどうでしょうか。

“ワンチーム”連携で 地域を支える

西岡 近年は、病院でも医療・介護の生き残りをかけた連携が強まり、“競争から協調（ワンチーム）”へと意識が変化しています。人材不足は共通の悩みなので、それぞれ得意分野の重複回避や患者さんの振り分けの効率化などが進みました。介護側も「すぐ入院・すぐ復帰」の連携を志向していますし、これは大病院でも同様の感覚があると思います。高齢者は増えているのに、患者や利用者の確保は容易でないのが実情で、多くが連携を模索していると思います。地域の医科大学などが音頭をとるケースもあります。

青山 情報の一体化と連携、“ワンチーム”的な発想は重要だと感じます。私は2年前に医療・福祉担当課へ異動し、現在は住民課長、保健センター長、診療所事務長を兼務しています。近々に、成年後見支援センターを立ち上げる予定です。限られたスタッフ人員になりますが、情報一元化の利点があります。

大島 様々な役割が、相互に密接に関連し合っていくという方向ですね。

青山 そうですね。小規模自治体は、縦割りでは対応困難ですから、行政、事業者、利用者を横断的にどうつなぐかを常に考えています。

「見えない世界を知ることが
次の一步につながることを実感」



[キャプテン]

青山幸一
愛知県豊根村
住民課長

「人に伝えることで気づきが生まれ、
そこから視野が広がる」



[主宰]

杉浦昭子
杉浦記念財団
理事長

す。同じ地域内でも、理解が異なる場合がありますが、その場合も「通訳」して橋渡しするだけで進むことが多い。医療と介護は、制度上は別ですが、利用者にとっては一つの生活です。“つなぎ方”的設計によって動きはスムーズになってきたと感じます。

私は、これまで仕事では地域振興の分野を主に担当してきましたが、介護現場から学ぶことが非常に多いです。経験や知識だけでは足りない部分を連携することで補い、豊根村内から近隣市町村・県へとネットワークが広がってきました。小さな単位で丁寧にフォローすることも重要だと感じています。

大島 それは多くの自治体が抱えている課題で、豊根村のようにうまく動いている事例は注目されるでしょう。最適解を考えることも大切ですが、何よりも皆で考えて実行に移すのはさらに難しいことなのです。

テクノロジーに どのように向き合うか

大島 冒頭に少し触れましたが、地域医療とDXの関係について何か思うところはありますか。

西岡 今後はAI診断も広がるでしょう。最終判断は医師がするにしても、AI診断の結果を受け入れる人は増えると思います。

青山 豊根村は医療機関が公営診療所しかな

い地域なので、遠隔医療や移動式診療の提案がよくありますが、診療所唯一の内科医の先生は、「医者は現場で診るもの」という考えです。患者さんの症状を診るだけではなく、その人が暮らす空間や背景を含めて診療すべきだから、リモートでは十分でないという考えです。AI診断が進んでも、現場の判断は必要と感じています。

大島 その考えは一理ありますが、すべてを拒否するのは行き過ぎかもしれません。私たちの時代は、直接診るしかなくて、症例経験を重ねて診断力を養いました。例えば、盲腸の場合などでも、現場で何十例もの実績を積んで初めて「ほぼ間違いない」と診断できたわけですが、今はAIに症状を入力するだけで即診断が出る。経験に基づく判断とはまったく異なりますが、それ自体はとても価値のあることです。場合によっては人間の診断よりも正確なこともあります。しかし、最終的には患者の身体を直接診ないとわからないところだわる医者はいますし、ベテランの医師と新米の医師とでは、経験の差が出るとも思います。すなわち100例のうち1例でミスがあるかどうかということが問われるような時代に向かっていると思います。医療界だけでなく、国民全体の問題として考えるべき問題でしょう。

西岡 AIは深層心理を理解しているのではなく、与えた条件から推定しているだけですから、インプットを間違えると結果も違ってきます。

以前、ある患者さんについて、当院の医師がAIで症状を調べたところ、結果に違和感があって、確認すると、「日本」と入力していなかったため、欧米のデータと解釈が引き出されていました。「前提ひとつで結果が大きく変わるので怖い」と、その医師は言っていました。

青山 介護でも同様で、人とロボット(AI)のどちらに介護されたいかという議論があります。AIが、深層心理まで読み取って快適なケアをする可能性もありますが、インプットを間違えると不快な対応になるかもしれません。人間のほうが気遣ってくれて申し訳なかったとか、感情が入りありがたみがあるなど、機械にはない可能性があります。ロボットはとても便利ですが、そうした難しさは当面は残るのだろうと思います。

大島 さきほどのような通院困難な場合などリモートにも役割があります。それも含めて、AIも「限界」を常に意識した上での活用が必要だと思います。

「学び伝えること」 が次の道を開く

青山 研究会では、「学び直し」も大切なテーマでした。私自身も、放送大学で学び直しをしています。この分野にはまったく関係ないのですが、天文学を学んでいます。

メンバーの三矢さんは、それまで市民団体の活動を中心でしたが、大学で現代社会学を教える授業やゼミを担当されるようになり、私も講義に呼んでいただいたり、逆に豊根村に来てもらったりと、現場を学生に還元する取り組みを進めています。最初から大学での教育者を目指していたわけではないと思いますが、活動を続ける中で自然とこうした道に進まれたのだと思います。

西岡 長久手市長選にまで立った岩岡さんは、研究会に参加し、「医療や介護福祉を知らなければ」と感じ、大学院に通い始めたと話していました。それをよく知らないことに気づき、すぐ行動に移したのは素晴らしいです。彼女にとって大きな転機だったと思います。

理事長 皆さん、とても意欲的で素晴らしいことです。杉浦記念財団としてこうした活動ができるなどを、杉浦顧問ともども心から嬉しく思っています。皆さんのが変わっていかれる様子を見るのは、とても楽しく嬉しいものです。

西岡 当初、大島先生から、「当事者が考えないといけない」と言われたことが印象に残っています。私も今は当事者ですが、10年後にはそうではなくなり、今後組織を支えるのは30代の世代です。今から視野を広げ、学び、課題だと思っていることは必ず自分たちで解決するよう、その準備をしておくよう呼び掛けている。同業種だけに閉じこもらず、異なる分野の人たちとつながることが重要だと改めて感じます。

理事長 それは大事なことですね。伝えることで気づきが生まれ、そこから視野が広がっていきます。

大島 伝えるということは、意図しなければできません。「背中を見て覚えろ」ということではないと思います。

青山 今、私たちの所では、医師、看護師、作業療法士、ケアマネジャー、介護職、訪問看護、保健師が月に一度集まり、勉強会を続けています。最近、「将来自分がどんなサービスを受けたいか」を考えることをテーマに議論しました。今の高齢者に対してではなく、30

～40代の現役の世代自分が、将来を自分ごととして、どうなりたいかを考えました。異なる職種が混ざって侃侃諤諤^{かんかんがくがく}と議論することが、一番意義があると思います。徐々に変わってきたと感じるのは、地元だけに閉じず、他の地域との関係性にも視野を広げるようになったことです。このように異業種の人と一緒に考え直すメリットは、研究会で得られた大きなポイントでした。

大島 自分ごとの議論は、人やお金、時間などの限られた資源をどう使えば、受ける人が大きな満足を得られるのかという問題にも関わります。自分たちでやり方を考え、実践し、その結果を自分たちで見るという、その経験は非常に大きなものです。徹底的に議論を重ねて「これしかない」というところに行き着けば、みんなが満足できる。正解ではないかもしれないけれど、議論をやり尽くすことが大切です。

若い世代が描く未来と 価値観の変化

西岡 私たちの組織では、30代の課長や主任たちを中心に、「ビジョン会議」という次世代のチームを立ち上げています。彼らは現場の課題から価値を見い出し、未来の社会や組織のあり方を真剣に議論しています。例えば、上の世代は、地域や患者への貢献を前提していましたが、30代はまず自分の生活を大切にし、その上で地域や患者に貢献するという価値観ですが、私自身も同感です。

大島 事実と将来予測を知ることで、問題の本質が見えてきます。それを自分の生活に置き換えて考えると、「このままではまずい」と実感し、考える回路が少しずつ形成され、様々な事象にも同様に反応できるようになります。

こうした価値観の共有がなければ、この会議は続かなかつたでしょう。

青山 この6年の間で、例えば、高齢者と若者が団地で一緒に暮らしたり、高齢者との交流アプリが登場したり、と新しい動きも出ています。高齢者問題を「高齢者だけのもの」にせず、若い世代を“混ぜる”設計が重要だと感じます。今回で一区切りですが、ここで得たネットワークと学びを広げていきたいと思っています。

大島 その意識が大切です。機会があれば培ったものを積極的に広げてゆくという意識を持って行動することが重要です。今日は6年間のプロセスを振り返りつつ、「なぜこの研究会を始めたのか」という原点に立ち返り、成果として何を残し、未来にどう手渡していくのかに焦点を当て、話を進めてきました。繰り返しになりますが、正解はなくても、議論はやり尽くすことが大切です。実行に移すのはさらに難しいことですが、今後の展開に期待したいと思います。



愛知県地域再生 まちづくり研究会 2023年度 研究活動概要



「第5回長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」の報告でステージに立つ次世代チームメンバー（2022年10月開催）

1 …… 研究の位置づけ

1 研究目的

高齢問題は、40年後に本当の課題が来る。だから現在の中年世代が、真の高齢社会へのつなぎ手として重要になってくる。今の高齢者は、21世紀高齢社会の「偽」の当事者であって、今の若者が高齢問題と正面から向き合う当事者となり、そして、現在ではまだ生まれていない、これから生まれてくる人たちが真の当事者になる。つなぎの世代となる中年世代の今後10年間の活躍によって、その先の高齢社会が決まる。

そこで、愛知県地域再生・まちづくり研究会では、研究のテーマを「これから生まれてくる人のために2060年をどうデザインしていくか」とし、40年の設計図を高齢社会の当事者が考えるものである。

2 これまでの経緯

愛知県地域再生・まちづくり研究会は、2015年に発足し、2018年までの3年間、大島伸一先生（国立長寿医療研究センター名誉総長）をはじめとした

先輩諸氏により研究を重ねられてきた。その結果、高齢社会の真の当事者となる次世代（若手・中堅）が我がこととして、今から議論を重ねることが重要であるという結論に至った。そこで、諸先生からの推薦により選出された次世代を担う若手・中年世代の者が、次世代チームとして、研究を引き継ぐこととなった。

次世代チームは、2019年に発足し、「愛知県における長生きを喜べるまちづくりとは何か」について、先輩諸先生のアドバイスを受けながら、真の高齢社会の当事者となる次世代の感覚で議論を進めてきたものである。

2019年から2022年の4年間に、研究の成果として以下2回のシンポジウムを開催し、研究成果を報告してきた。

①2019年9月20日

長生きを喜べるまちづくりシンポジウム
「少子高齢社会・AI時代の働き方、暮らし方～次世代チームが考える100歳人生～」

②2022年10月2日

長生きを喜べるまちづくりシンポジウム
「次世代が考えた100歳人生のヒント～気づかず生きるリスクと気づいて開ける未来～」

この4年間の研究で導き出されたのは、「これから40年間には社会常識が覆るほどの変化が訪れる。その変化にいち早く気づき、準備をしていくことが最も大切であるということ」である。日本は、今後40年以上にわたって超高齢の人口構成の社会状況が続く。これは単に高齢者が増える人口構成の変化だけでなく、大きな技術革新による変化と高齢者家族の形態の劇的な変化が合わせて生じることといった、大きな社会常識が覆る変化である。40年後には、現在は、人間の行っている多くの活動や多くの領域を

AI知能などの技術が担うようになるとともに、多くの人々が単身で過ごす単身社会が形成されると推測する。

また、高齢者の約4割が認知症を発症し、社会に大きな影響を与える社会になることがわかった。次世代チームとしては、そうした今の社会から大きく常識が変化することに対して、今の段階から準備を行っていくことの大切さを導き出した。

3 2023年度テーマの設定

そこで2023年度は、これまでの研究の成果を踏まえ、「長生きを喜べるまち」を実現していくための要素として、人口構成、技術進歩、生活様式など、たくさんの点が指摘された。そこで、40年後の高齢社会の課題解決に向けて、複数の課題を総合的に研究するのではなく、個別のテーマに研究領域を絞り込み、より具体的な事象を深掘りすることで、長生きを喜べる2060年のあり方を探っていくこととした。

我々は、高齢社会が到来する2060年に長生きを喜ぶためには、様々な要素があるが、人生の終盤の期間をいかに幸せに過ごせるかが、最大の要因になると提案してきた（2022年10月シンポジウム報告）。長生き人生の終盤は、老いが進み、体力的にも、気力的にも、これまでできていたことができなくなってくる期間である。さらに全体の4割の方に認知症の症状が発症すると推測されており、認知症になってしまっても幸せに生きることが長生きを喜べることの大きな要因であると考えた。これは翻って、「認知症になった時に安心できない、困ることは何か」を深掘りすることだと考え、「認知症になると不幸なのか」をテーマとし、2060年に長生きを喜べるまちづくりの研究を進めることとした。

2 …… 2023年度研究成果

2023年度の研究は、4回の研究会の開催を基軸に、その前に次世代チームのみのオンラインによる討論を行い、研究テーマの深掘りを進めていく体制で行ったものである。次に4回の研究会の要点を掲げる。

第1回 テーマ設定と議論の 方向整理

2023年8月25日（金）18：30～20：30

スギ薬局本社会議室

2023年度のテーマとして「認知症になっても幸せか×2060」を選定した。

認知症は若年層が罹患する場合もあるが、本研究会は高齢社会における社会のあり方を研究するものであることと、高齢による認知症数が多いことから、高齢年代に認知症になった場合、幸せなのかどうかという点に絞って議論することとした。

まず、現在の時点での認知症になった場合に何が課題なのかを討議した。

[メンバーからの指摘事項]

- ・認知症について十分知識が広まっていない状況であり、誤った理解や認知症の特性を知つていれば理解できることもあることから、認知症に対する知識をどのように一般化する（知る）かが重要である。
- ・認知症という病気ととらえると不幸といえる。どうつきあうか、どう受け入れられるかが大切と思う。
- ・認知症になっても幸せかどうかは、生活環境に影響される。特に家族が成立しているケースと家族がないケースで違いが出る、

- ・どういう状態が満たされれば幸せかの整理が必要である。考える必要がある条件としては、個人面からの条件と社会面の条件の2面に分けて検討する必要がある。
- ・個人の面としては、認知症になつていろいろなことがわからなくとも、生活が充実していれば幸せなのかもしれない。社会面として、認知症に関わる周りの人が大変といえる。
- ・幸せかどうかは、自身の理解、周りの理解、男女での違い、地域での違いなど、いろいろな条件が関係してくると思う。
- ・課題は、「納得できるケアとは何か」である。医療面のケア、家族におけるケア、地域におけるケアなど認知症の方がおかれ周辺環境を整理していく必要がある。
- ・認知症の方の人口がどうなるか、いつがピークなのかなど、2060年の条件整理が必要となる。
- ・認知症の方本人は24時間つらいわけではない。当事者は不幸ではないと思う。

認知症について、どういう状況が課題か討議したまとめとして、認知症を取り巻く環境は、非常に多様であり、一括りに整理できるものではないが、「認知症になっても、自分自身で何が良いかを選択できる環境や社会があれば、幸せに過ごすことができるのではないか」という仮説を整理することができた。

では、どのような条件があれば満足できるかについて、次回、深掘りすることとしていくこととした。

次回の検討のポイントを「①現在の個人 ②2060の個人」の二面から議論することとして、第1回研究会は終了した。

第1回の研究における認知症の定義

- 一旦獲得した知的機能が障害により自立した生活が困難になった状態。

- ・軽度認知障害（前兆）から、軽度（判断低下）、中度（記憶障害）、重度（記憶ない、意欲低下、寝たきり）と進行する。
- ・平均期間5～12年間。
- ・全体の4人に1人が発症する。

第1回の研究における2060年社会を想定する前提条件

【技術面】

- ・認知症は治せないが、進行を遅らせることは可能になっている。
- ・AIによる寄り添いが実現している。

【体制面】

- ・単身社会を迎える、家族はない。（もしくは、老老生活）
- ・施設介護はAIケアが主流で、機械による介護が行われている。

しかし、入所できるのは富裕層のみで（高額なため）、多くの人々は、在宅でデジタル通信によるケアとなっている。

【経済面】

- ・高齢者の多くは貧困状態にある。年金は少額で、現役時の貯蓄もない状態。

第2回

どのような条件があれば満足できるか

2023年10月27日（金）18：30～20：30

スギ薬局本社会議室

認知症になっても幸せに暮らせる条件について、一定の条件を想定した上で、認知症の方個人の面から考えた視点をチームメンバーそれぞれから報告を受けた。

まず、今回検討する前提条件は、①自宅で過ごすことができている ②中度の認知症で一人暮らし

- ③一人での外出は可能、とし、個人の視点から、住み慣れた自宅で一人暮らしの認知症になってしまっても幸せに暮らせる条件について報告を受けた。

【メンバーからの指摘事項】

- ・幻覚、幻聴、弄便などの認知症の諸症状が起きることと、周りへの迷惑をかけることの不安（メンバー共通）
- ・資金確保の不安（青山）
- ・気持ち良く暮らしたい（長谷川）
- ・周りに迷惑をかけないこと（長谷川）
- ・近所とのつながり（三矢）
- ・服薬管理はテクノロジーで（三矢）
- ・誰が介護してくれるか（三矢）
- ・迷惑かけるなら死なせてほしい（三矢）
- ・自分ごとになっていない（若杉）
- ・家族・地域など周囲の理解（若杉）
- ・話を聞いてくれる相手（若杉）
- ・住処の確保（西岡）
- ・さみしいに対応するサービス（西岡）
- ・仲間がいること（西岡）
- ・暮らし、財産が守られる仕組み（西岡）
- ・尊厳死の課題（岩岡）

報告を踏まえ、メンバーによる討議を行った。討議の主な内容を次に掲げる。

- ・迷惑をかけるなら死にたいという思いはわかるが、尊厳死をどのように捉えるべきか、が大きな問題である。「死なせてほしい」を死なせることになることは大きな問題。
- ・迷惑とは何であろうか。種類と度合いによると、周りの受け入れ方や本人と周りの関係性によって違ってくる。どのような行為が迷惑なののかがわかれれば、対応の仕方が導き出せるのではないか。

- ・人間のケアよりも機械によるケアのほうが、安心して受けられるのではないか。人間だとどうしても相性が出る。機械であれば、AI技術などにより本人の希望に合う正しい決定をしてくれるのではないか。また機械のケアのほうが、本人の希望に合致する客観性があり、感情がないので変な感情を入れずに素直に受け入れられるのではないか。
- ・認知症の期間は5年から12年程度であるが、これまで習得してきたことを喪失していく最後の5年間をどう受け入れられるかが重要。本人が、自身の喪失を受け入れながら、どのように本人が満足する意思決定ができるかどうかである。
- ・個人と社会の関係性を整理していく必要があるが、それぞれ個人の価値観は違うので、価値観が違うことを前提にした検討が必要である。

今回の研究により、認知症の方本人が、認知症による喪失を受け入れながら、機械などの助けを受けながら、自身の選択ができる状況になれば幸せになると考えられた。

しかしながら、本人の選択による満足とは別に、家族や周りの人たちとの関係性がうまくいかないと



コロナ禍もオンライン会議で議論を続けた

不幸せになってしまう（本人が不幸せを感じてしまう、周りが不幸せを感じてしまう）と思われることから、次回は、「認知症の方を社会の中でどう受け入れるか」について研究することとした。

社会の中での受け入れの深掘りのポイントとして、「認知症の方が社会に対して迷惑をかけてしまうと感じることはどのようなことなのか」を研究することとした。

第3回 迷惑がかかるとは どのようなことか

2023年12月22日（金）19：00～20：30
スギ薬局本社会議室

前回までの研究により、「認知症になると、周りの人に迷惑をかけるようだ」ということがはっきりしてきた。認知症になった時の不安として「周りに迷惑をかけることになるのは嫌だ」という意見が多くあり、「迷惑をかけるとはどういうことか」をはっきりさせることで、「認知症になっても、迷惑をかけずに済む、あるいは迷惑な状態にならないための方法を考えることが重要だ」という仮説に至った。

研究会に先立った、事前における次世代チームメンバーのみのWEB討論では、解決の可能性として以下が取り上げられた。

- ・迷惑をかけるかもしれない人と予め関係を築いておく必要。
- ・迷惑をかけてはいけないという価値観からの転換を図る必要。
- ・かなりの数が認知症高齢者になってくれば、それはそういうもの、という価値観に社会が変わる可能性があるので、この問題自体が一時的な（数年～数十年）ものかもしれない。

そこで、第3回は、認知症の人が引き起こす耐え難い行動について、メンバーが思うことを報告することで「迷惑」という意味を深掘りすることとした。

[メンバーからの指摘事項]

- 本人は、悪意なく行うことが、家族や介護者、近隣にとって困ったことになる行動・弄便・暴言・被害妄想・幻視・幻覚。(青山)
- 不潔行為(排泄の問題)、暴言(イライラして声を荒げる)、徘徊、排泄。イノベーションで調べたが、あまり良い事例は見当たらなかった。(若杉)
- 暴言・暴力は、周りの理解があったとしても傷つけることには変わりない。ゴミ屋敷になることも、周りにも本人にとっても、良い状態とはいえない。徘徊行為は、周りの精神的・肉体的負担が出てくる。(長谷川)
- 妄想が前提となって、人に「あなたがお金を盗んだ」などと叱責すること。意味不明なことで、コンビニの店員などに暴言を浴びせる。不衛生な状態を放置し、近所に住んでいる側からして、匂う、汚いといった苦痛を与えられる。こちらが急いでいる時に、会計で手間取る。バスの乗降でモタモタされること。遅い時間に、近所のお宅に出向いて扉をたたいて呼び出し、よくわからないことを言う。(三矢)
- 排除されること。(都築)
- 車の運転問題。銀行などへのクレーマー。状況をどれだけサポートできる仕組みをつくるかは、広い範囲で考えられるのではないか。(岩岡)
- 自分自身の生活が困難になる。孤立している人に迷惑はあまり発生しないのではないか。許容できるか、許容できないか、は人によつ



立ち上げ当初に勢ぞろいした次世代メンバー

て異なる。大多数の人が迷惑だと思うことは、何か行動に対する対応を考えるか、ロボットあるいはプロが行う仕組みにできればよい。(西岡)

報告を踏まえ、オブザーバーより次の指摘を受けた。

- 老いとか認知症が自分から遠いものとして語られている違和感がある。発想のベースに「我がこと」という認識がないと、共生社会には結びつかない。もう少し自分に引き寄せて考えるべき。(鈴木先生)
- 認知症について「迷惑」と「耐えがたい」というワードで討論すること自体、私には「耐えがたい」こと。(大森先生)
- 迷惑という言葉の向こう側に、迷惑をかける人、かけられる人という二項対立になってしまった気がした。(糸先生)

オブザーバーからの指摘を踏まえた討議を行った。次世代チームとして、認知症を我がこととして考えて、嫌だなと思うことを出したものであったが、「我がことじゃない」と指摘されたことは、当事者の気持ちを理解するのに限界があることが判明した。

また、多くの人に投げかけていくためには、言葉の表現についても意図が正確に伝わるよう注意する必要があることも、指摘を受けて理解できた。

認知症の問題としては、小さい子が排泄してしまっても、大きな問題にはならない。子どもで障害のある人がおかしな行動をとっても、過度に怒ることはない。今まで普通だった人が変わったら「おかしい」となってしまうが、これはどういうことなのか。

逆に、オランダのHogeweyといった、認知症の方だけが生活する村をつくっていくのは、囲い込みになる。それが果たして本当に幸せなのか。私たちのまちでは、認知症の方をどうしていくのがいいのかを考えていく必要がある。

人口構造が変わっていく中での認知症対応と、これまでの認知症対応ではまったく違う。もう少し俯瞰して、「社会的な包摶をどう考えるか」「認知症高齢者と共生する社会をどのように制度設計するか、仕組みを作るのか」について研究を進めることとした。

第4回 認知症フレンドリーな 社会のあり方について

2024年3月1日（金）19：00～20：30
長谷川ビル会議室

認知症高齢者と共生する社会のありようの一つとして、イギリスのアルツハイマー病協会では、認知症フレンドリーコミュニティに関するガイドラインを示しており、それを参考に認知症の方の視点に立ったまちづくりがなされれば、認知症になってしまっても幸せに暮らすことを実現できると考え、次世代メンバーが考える「認知症フレンドリーな社会」について討議を行った。

[メンバーからの指摘事項]

- ・認知症の方と自然に出会う機会がある社会。
(長谷川)
- ・認知症に寛容な人・社会を育てること。(三矢)
- ・認知症は誰でも訪れる老化現象ととらえる。
(若杉)
- ・認知症と特別視せず、社会全体で認め合うこと。(青山)
- ・専門職だけ、家族だけでなく、認知症の方の暮らしに関わる人々の理解と協力を広げていくこと。(西岡)

メンバー報告を踏まえ、討議を行った。

メンバーからは、知らないから恐れてしまう(長谷川)、知っていると知らないとのギャップがある(三矢)など、これまでの認知症に対する関係性の度合いや認知症の方と接する経験や知識の差により、とらえ方が違っていることや、地域の中で認知症を分けるのではなく混ぜるべき(若杉)という、認知症を知る機会をつくっていく必要性が指摘された。

アドバイザーからは、当事者の視点に立って考えること(桑先生)、知ることは簡単だから、まずは知ることから始めるべき(鈴木先生)、老いの価値を知ること(後先生)のアドバイスがあり、まずは、若い世代が認知症を知ることから始めることの大切さが指摘された。

次世代メンバーとしても、経験や知識、立場の違いで見え方が大きく違っており、経験や知識、立場によって寛容にもなれるし、不快にもなることから、自分たちの立場でできることを探していくことをまとめとし、そのためには、認知症を知るための仕組みづくりが大切であるという結論に至って研究会を終了した。

3……おわりに

2023年度研究会は、40年後の超高齢社会のあり方を探るために、テーマを「認知症」に絞り込み、具体的課題から「長生きを喜べるまち」のありようを見つめることとして活動を進めてきた。

まず明確となったのは、2019年から4年間にわたって「長生きを喜べるまちづくり」について、議論を重ねてきた次世代メンバーであったが、「認知症」という個別のテーマに対しては、認識が大きく異なっていたことである。特に日頃から業務的に携わっているメンバーにとっては、認知症を常識のこと、一般的なことと捉えたが、業務や生活の中で認知症に関わりの少ないメンバーにおいては、認知症の認識が文章やネットの情報にとどまり、実感が乏しく、我がことにしてすることに苦しんだことである。

認知症という言葉自体は、社会全体に広く一般に認識されていると考えるが、認知症の方の思いや、認知症の具体的な内容については、社会の中での認識に大きな差があり、いざ家族や暮らしの周辺で認知症の方に直面してから、対応に戸惑っているということが現実であろう。中堅世代として、それぞれの分野で中心的に行っている次世代メンバーの間で、こうした大きなギャップが確認できたことは、認知症に対する社会全般での認識ギャップは、広く潜在していることを示すこととなった。

そのため、認知症については、多くの人が、まず知ることが大切である。身近な存在とする中から、様々な解決策が生まれてくることになると確信するものである。

次に明確になったのは、我がこととして未来を考える重要さである。2022年10月のシンポジウムで、我々、次世代メンバーは、100歳人生のヒントを「気づかず生きるリスクと気づいて開ける未来」を副題として、将来のリスクに今から気づいて対策していくことの重要さを提案したが、まさしく我々自身も、認知症に対して未来のリスクを気づいておらず、大きなリスクを抱えた状態にあったということ

である。大島座長からは「気が付いたことは大きな進歩だ」と大変やさしいご指摘をいただいたが、研究会を通じて、未来の課題を我がこととして考える難しさを実感したところである。我々としては、目の前の仕事や課題解決に追われる日々でも、「未来を我がことにして考える」ことを、自分自身の思考パターンとして身につけるべきであると感じたところである。

今年度研究は、認知症という一面を切り取って進めたが、「長生きを喜べるまち」にする要素は、認知症問題以外にも多様かつ複雑にあるため、本研究会として、今後も、具体的な課題について未来のあり方を深掘りしていく必要がある。

さらには、「未来我がこと思考」を自分自身の関わっている地域や活動組織へ広げていくことが、愛知県における「長生きを喜べるまちづくり」を実現するための第一歩となることであろう。そして、「未来我がこと思考」の広がりと積み重ねが実現することで、40年後の真の高齢社会の課題解決につながることを確信するものである。愛知県の高齢社会が、より良い姿になるよう、今後も研究をさらに深めていきたいと考えるものである。

この研究会を通じて、これまでの活動の中では気づくことのない、多くの気づきがあった。また、次世代メンバーが異業種であったこともあり、メンバー間での新しいつながりの広がりも進みつつある。こうした機会を与えていただいた、公益財団法人杉浦記念財団杉浦昭子理事長をはじめとした財団の皆さん、大島伸一先生をはじめとした先生方、また、快く講師を引き受けいただいた先生方など研究会に關係いただいた多くの皆さんに感謝とお礼を申し上げ、眞の高齢社会を、長生きを喜べるまちを実現するよう努力していくことを誓い、2023年度研究の報告とさせていただく。

文責：次世代チーム
キャプテン：青山幸一



青山 幸一

愛知県豊根村
住民課長

未来思考を広げよう

未曾有の高齢社会が到来することを課題に始まった本研究であるが、導き出された結論は、単身社会の成立と人工知能の発達による社会構造の大変革であった。私たちの社会は、“人間”的家族を単位とした血縁や地縁といった物理的な範囲によって長年仕組みづくられてきたが、近い将来、単身化とAIにより、人間の価値観、技術との関係性が大きく変わるため違う社会デザインが必要となる。大きな気づきは、これまでの考え方の延長では対応しきれないことを自覚したことだ。未来思考をベースにすると、見える世界が違ってくる。自分の考え方を、これまでよりもさらに積極果敢にアップデートしていくとともに、未来への備えを社会へ広げていきたい。

まちづくり研究会への参加を通じて、地域の健康と福祉を軸としたまちづくりの重要性を深く実感した。大島名誉総長をはじめとする諸氏との活発な議論を重ねる中で、医療や介護を単なる制度としてではなく「地域の暮らしの基盤」として捉える視点が培われた。この学びを契機として東京医科歯科大学大学院に進学し、医療政策の修士号を取得した。現在は長久手市及び名古屋市千種区において、がん患者や家族を支える施設を運営するとともに、地域共生の仕組みづくりに関する研究も継続している。子どもから高齢者までが支え合う場の創出に取り組む中で、研究会で得た知見が私の実践と探究の礎となっている。



まちづくりへの実践と探究 地域共生を軸とした



岩岡 ひとみ

NPO法人
全国福祉理美容師養成協会(ふくりび)
TOTONOUハウス責任者



西岡 麻知子

南医療生活協同組合
常勤理事

未来づくりにむけて 当事者として考え方抜く

私にとって本研究会は、各分野で起きている現実及び変化を学び、徹底的に考え方抜くことをした刺激的な研究会であった。

私は、医療介護業界で働いている。高齢化以上に「働き手減少」のインパクトが大きく、また異分野で活躍するメンバーと意見交換することで、業界での常識はそうでない者にとって常識ではないと痛感する、多様な考え方や価値観を知る機会としても貴重であった。特に、金融やAI、貧困や格差のテーマは無知に近い状況であったが、避けては通れない課題であることに気づいた。

この経験から、所属する組織で30~40代の医師、看護師、介護福祉士、歯科衛生士、事務員などを集めて、持続可能な医療介護事業のアクションプランを議論する「ビジョン会議」に取り組んでいる。まだ道半ばであるが、彼らは様々な改革案とともに、手放してはいけない価値は「お互い様の関係」であると言った。人と人のつながりが、どの世代にとっても「暮らしを豊かにできる」ことを実体験として持っている彼らならではの言葉である。



長谷川 友紀
コミュニティ・ユース・バンクmomo
共同代表

迷惑をかけ合いながら 支え合える社会へ

認知症をテーマに研究会を重ねる中で、認知症を「知らないから恐れてしまう」ことに気づいた。また、幼少期から「人に迷惑をかけてはいけない」と教えられてきた価値観が、他者を頼ることの難しさにつながっていると実感した。認知症に限らず、精神疾患や重度の障がい、医療的ケアを必要とする人など、地域での暮らしに困難を抱える人は少なくない。こうした当事者を支えるソーシャルビジネス事業者を支援する立場として、当事者だけでなく地域社会とともに課題に向き合う姿勢の重要性を改めて感じている。私たち一人ひとりが社会課題を自分ごととして捉え、迷惑をかけ合いながら支え合える社会を目指して、これからも実践を重ねていきたい。

2023年4月、名古屋学院大学現代社会学部准教授に就任したこともあり、まちづくり研究会での学びや経験が大いに役立っている。ゼミ生にまちづくりや地域再生に関心がある学生が多いこともあり、青山幸一さんを大学に招いてお話を伺った他、豊根村での合宿を実施した。三矢は大学教員活動の傍ら、まちづくりNPOの活動もしているが、自分が割ける時間が減ったことをきっかけとして、長谷川友紀さんにNPO活動を助けてもらうようになった。また、自分が担当している講義「都市コモンズ論」では、これから住まいや職場を話す際に、20年後、30年後の社会のあり方に視野を広げるようにするなど、研究会での学びが活きている。



研究会での学びを 20代の若者らに伝える

三矢 勝司
名古屋学院大学 現代社会学部
准教授
NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
理事



若杉 玲子
愛知県長久手市
教育部次長

「2050年、あなたは何歳で、 どう暮らしていきますか？」

第4回シンポジウムで参加者に問うたこの質問を、私は同じ時期に職場でも投げかけた。その時に「ワイナリーで暮らしている」と発言した職員が、今年職場を退職し、ワインをつくるために長野に移住した。「あの時の質問が、私の方向性を決めた」という。

長生きを喜べるために、自分はどう生きたいのか、社会資源を含めて足りないことは何なのか等々を考えるきっかけになる良い質問だと思う。だから私は今も、機会を見つければ、自分自身に、そして隣に座った人にこの質問を投げかけ続けている。私自身も明確に答えられないし、「そんなこと、考えたこともない」と一笑されることがほとんどだが、そんな積み重ねが大事だと感じている。



研究活動アドバイザー／オブザーバーから

アドバイザー

現場とグローバルの交錯のなかで

後 房雄

名古屋大学 名誉教授

福祉、まちづくりの諸分野で働き盛りの中堅として活躍中のメンバーの議論にアドバイザーとして参加し、私自身もいろいろと刺激をいただいた。それぞれの現場での経験や情報と、ナショナル、グローバルに加速しつつあるAI、単身化などの潮流を交錯させながら政策を考える機会は、これから必須になると考える。参加者の皆さんに、グローバルな視野を持つ現場専門家としてさらに活躍していくことを期待したい。

オブザーバー

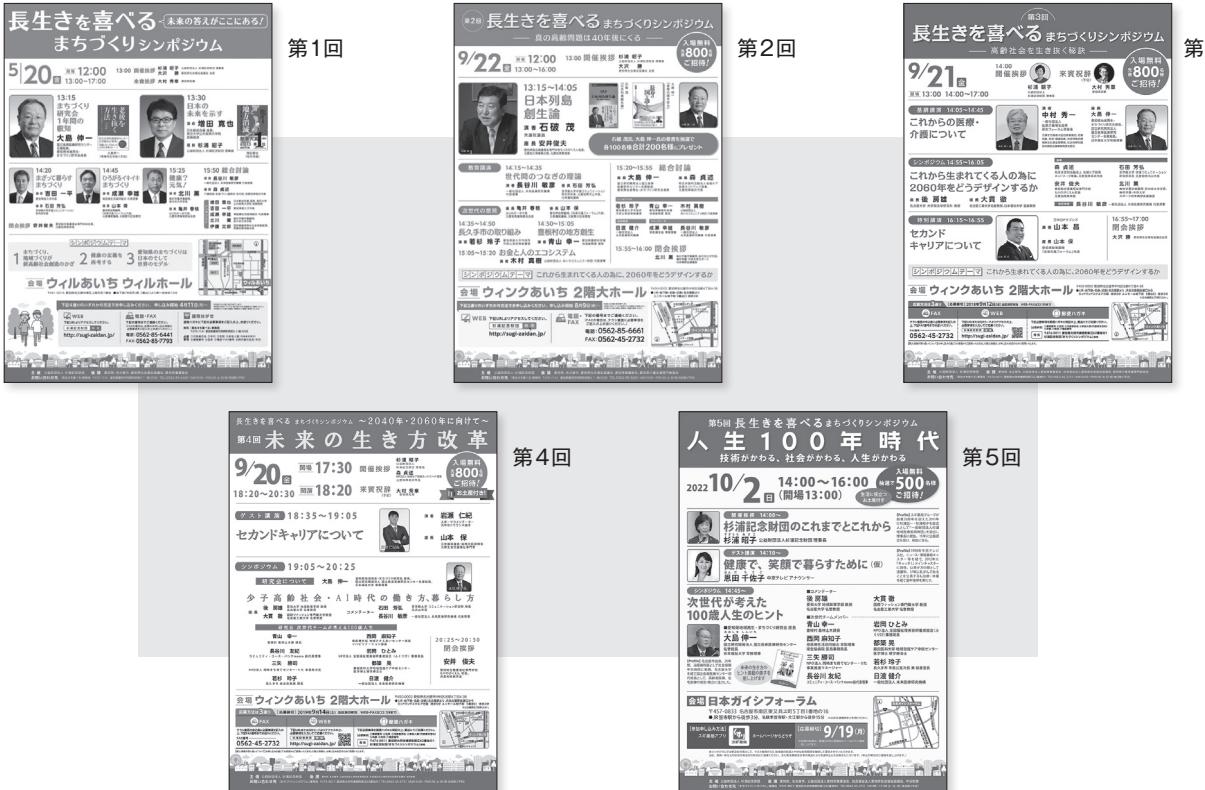
未来の高齢者に期待！

糸 和彦

名古屋市立大学 大学院薬学研究科・薬学部 神経薬理学分野 教授

福祉・医療政策は、私の大学教員としての専門ではないが、学生時代から社会活動に参加し勉強を続けていた縁で、本研究会にオブザーバーとして参加させていただいた。多様な分野の第一線で実務に従事する若手が集まり、毎回、刺激的で活発な議論がされた。特に30年後の理想的高齢社会のあり方や、認知症になる不幸についての討論では、それぞれの参加者が接する高齢者や、その立場・考え方の違いから相異なる意見が飛び交い、高齢者の私には青く見えるものもあり、意見がまとまらないこともあった。しかし、その過程には大きな意義があったと思う。未来の高齢者の皆さんのがんばりを祈念し、貴重な機会をいただいたことを感謝する。

■長生きを喜べるまちづくりシンポジウム ポスター(第1~5回)



■研究会報告の一覧

長生きを喜べるまちへ「愛知への提言」
(2016年 大島伸一監修、長谷川敏彦編著)

長生きを喜べるまちへ 真の高齢問題は40年後にくる
第2回長生きを喜べるまちづくりシンポジウム講演録
(2017年)

愛知から提案する新高齢社会のまちづくり
~愛知県地域再生・まちづくり研究会3年間のまとめ~
(2018年 大島伸一監修、長谷川敏彦編著)

杉浦記念財団通信
第3回まちづくりシンポが盛況裏に開催
2030年の「未来の生き方改革」テーマで次世代熱く語る

2019年秋号
長生きを喜べるまちへ
危機意識をもって
世界を変える
人材育成
地域活性化
政策提言
研究開発
国際交流
人材育成
地域活性化
政策提言
研究開発
国際交流

愛知県地域再生・まちづくり研究会 次世代チーム報告
長生きを喜べるまちを
つくるために
未来の生き方改革

2018年秋号
長生きを喜べるまちをつくるために
未来の生き方改革
2018-2024
次世代チーム活動報告
杉浦記念財団

杉浦記念財団通信
第4回まちづくりシンポジウム採録
(2019年)

長生きを喜べるまちをつくるために
未来の生き方改革
(2022年)

愛知県地域再生・まちづくり研究会
次世代チーム活動報告 2018-2024
(2025年)

愛知県地域再生・まちづくり研究会 実績一覧

日程	研究テーマ	講師等	
2015年			
第1回 4月21日(火)	超高齢化社会における愛知県の地域づくりまちづくりの課題		
第2回 5月15日(金)	超高齢化社会における愛知県の地域づくりまちづくりとは何か		
第3回 6月19日(金)	課題提起：1.研究会の方向性／2.健康概念について／3.共有すべき基本的現状と未来予測分析		
第4回 7月17日(金)	提言に向けて、地域再生、地方分権、住民活動		
第5回 8月28日(金)	地方分権、ケアの在り方：1.長久手町での地域づくりの取り組み／2.地域包括ケアとは何か		
第6回 10月16日(金)	「まちづくりの中で居方／居場所の概念について」事例紹介も含めて 「まちづくり活動の枠組みについて」事例紹介も含めて	鈴木 毅 近畿大学 理工学部 建築学科 環境系工学専攻 教授	
		広石拓司 株式会社エンバブリック 代表取締役	
第7回 11月20日(金)	経産省の政策から見た地域づくり、健康づくり政策 農林水産省が考える地域づくり、まちづくり政策	江崎楳英 経済産業省 ヘルスケア産業 課長	
		渡邊 肇 農林水産省 食料産業局 食文化・市場開拓課	
第8回 12月18日(金)	高齢者活躍支援活動 地域から見て 高齢者活躍支援活動 職場から見て	堀池喜一郎 好齢ビジネスパートナーズ 世話人	
		加茂田信則 株式会社前川製作所 顧問	
2016年			
第9回 1月15日(金)	大阪泉北ニュータウンの取り組みについて 南医療生活協同組合の取り組みについて	森 一彦 大阪市立大学 生活科学研究科・生活科学部 教授	
		成瀬幸雄 南医療生活協同組合 代表理事・専務理事	
第10回 2月19日(金)	死の質／生命の質(QOD/QOL)分析 長久手市、財政、医療福祉未来予測	平尾智宏 香川大学 医学部 公衆衛生学 教授	
		小塩篤史 事業構想大学院大学大学院 研究科長・教授／イノベーション・データサイエンス・未来学	
第11回 3月25日(金)	研究会10回を振り返って、今後を展望する		
第12回 5月20日(金)	「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」【ウィルあいちウィルホール640名参加】		
第13回 6月17日(金)	「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」を振り返り今後の予定		
第14回 7月15日(金)	愛知県の地域再生計画について 豊根村まち・ひと・しごと創生総合戦略について	稻波智子 元愛知県振興部地域政策課主幹(地域振興)主幹	
		青山幸一 豊根村役場 地域振興課 課長	
第15回 8月19日(金)	住民主体のまちづくり～高浜市の実践～ 三遠南信の地域づくり	吉岡初浩 高浜市市長	
		戸田敏行 愛知大学 地域政策学部 地域政策学科	
第16回 9月16日(金)	地域研究センター 教授	大森 瀾 東京大学 名誉教授 自治体行政学、地方自治論	
第17回 10月14日(金)	もうこれしかない！わざらわしいまち	吉田一平 長久手市長	
第18回 11月18日(金)	多世代共生のまちの実現に向けて～自立と連携によるまちづくり～	太田稔彦 豊田市長	
2017年			
第19回 1月20日(金)	地方創生と共生支援	山崎史郎 特定非営利活動法人地域ケア政策ネットワーク総括研究主幹／元厚生労働省社会・援護局長／元まち・ひと・しごと創生本部事務局地方創生総括官／元消費者庁次長(内閣府政策統括官)	
第20回 2月17日(金)	地域づくりのための仕組みと主体	後 房雄 名古屋大学大学院 法学研究科 教授	
第21回 3月17日(金)	都市・地域計画、危機管理、市民参加	青山公三 京都府立大学 京都政策研究センター長	
		龍谷大学 大学院政策学研究科 教授 一般社団法人地域問題研究所 理事長	
第22回 5月26日(金)	技術と身体、そして〈まちづくり〉一人間のロボット化を避けるために	大貫 徹 名古屋工業大学 基礎教育類／社会工学専攻 建築・デザイン分野／工学教育総合センター 教授	
第23回 6月23日(金)	若者の意見「超高齢社会に未来はあるか?」／シンポジウム打ち合わせ	日渡健介 一般社団法人未来医療研究機構	
第24回 7月28日(金)	地域共生社会の実現にむけた社会福祉法の改定について	原田正樹 日本福祉大学 教授	
第25回 8月18日(金)	お金とのエコシステム／報告集・シンポジウム打ち合わせ	木村真樹 公益財団法人あいちコミュニティ財団 代表理事	
第26回 9月22日(金)	第2回「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」【ウィンクあいち大ホール880名参加】		
第27回 11月17日(金)	幸福な人生を生きるために	桂川憲生 岐阜県東白川村 地域振興課長	
第28回 12月15日(金)	次世代に向けた身体観の創設	北川 薫 梅村学園 学事顧問(元中京大学 学長)	
2018年			
第29回 1月12日(金)	「ちた型0～100歳の地域包括ケアのまちづくり」	市野 恵 特定非営利活動法人地域福祉サポートちた 代表理事	
第30回 2月16日(金)	「むすびGroupから始める…住みやすい“まちづくり”」 「祭だ！祭だ！日本の伝統的祭の持つ持続性の考察」	三宅直也 むすびGroup むすびdesign名古屋 代表	
第31回 3月 9日(金)	研究会のまとめ	石田芳弘 至学館大学 伊達コミュニケーション研究所 所長	
第32回 5月11日(金)	医療介護の大改革とそれを支える国民経済の現状	権丈善一 慶應義塾大学 商学部 教授	
第2期			
第1回 6月 8日(金)	地域再生まちづくり研究会 3年間のまとめとこれから	長谷川敏彦 一般社団法人未来医療研究機構 代表理事	
第2回 8月17日(金)	少子高齢化社会で何が問題かのワークショップ	大島 伸一 国立長寿医療研究センター 名誉総長	
		大貫 徹 名古屋大学 名誉教授／日本福祉大学 客員教授	
第3回 9月21日(金)	第3回「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」【ウィンクあいち大ホール800名参加】		
	「人口動態から見る世界と日本の未来」	日渡健介 一般社団法人未来医療研究機構	
第4回 10月12日(金)	「愛知のてっぺん豊根村で取り組んでいること」 「ふつうに暮らせるしあわせをどう守り支えるか」	青山幸一 豊根村役場 地域振興課長	
		都築 晃 藤田医科大学 地域包括ケア中核センター	
第5回 11月 9日(金)	「緊急時にも活きる平常時からの市民セクターによる連携体制の構築～南海トラフ地震に向けて」 「“共感”が生み出す地域のつながり」	栗田暢之 認定特定非営利活動法人レスキュースックヤード	
		長谷川友紀 コミュニティ・ユース・バンクmomo 代表理事	
第6回 12月14日(金)	「ながくて幸せのモノサシづくり」 「人や土地建物、金を動かす 新しい価値観を育てる～既にある未来をヒントに～」 「アジアの高齢者の構造と課題」	若杉玲子 長久手市役所 政策秘書課	
		三矢勝司 NPO法人 岡崎まち育てセンター・りた／名古屋工業大学 コミュニティ創成教育研究センター	
		日渡健介 一般社団法人未来医療研究機構	

日程	研究テーマ	講師等
2019年		
第7回 1月11日(金)	自治体戦略2040構想～人口減少・超高齢社会における自治体の行政経営改革～	植田昌也 総務省自治行政局 行政経営支援室長 2040戦略室長
第8回 2月 8日(金)	デジタル社会の羅針盤	太田直樹 株式会社 New Stories 代表
第9回 3月 8日(金)	「2040年さらには2060年の私たち一汎用AI、BIそして自由な単独者」 「2060年を考える一つの基本線－社会科学から見たAIとBI」	大貫 徹 名古屋工業大学 名誉教授／日本福祉大学 客員教授 後 房雄 名古屋大学 大学院法学研究科 教授
第10回 4月13日(土)	前半：ディスカッション・今までのインプットした内容を踏まえて課題の共有／後半：ディスカッション・提言バージョン1の骨子の作成／総合討論：アドバイザーとの討論	座長：大島伸一／アドバイザー／次世代チーム
第11回 5月10日(金)	2040年&2060年の暮らし方イメージのシート発表	次世代チーム
	1. 人口動態	日渡、青山、都築
第12回 6月14日(金)	2. AI・テクノロジーの予測～仕事～ 3. AI・テクノロジーの予測～生活(特に医療・福祉)～	青山、三矢、若杉、長谷川友紀 青野、岩岡、都築、西岡
第13回 6月22日(土)	働き方チーム打合せ	座長：大島伸一／次世代チーム
第14回 8月 9日(金)	長生きを喜べるまちづくりシンポジウムの内容確認、リハーサル	
第15回 9月 8日(日)	まちづくりシンポジウムリハーサル【少子高齢社会・AI時代の働き方・暮らし方】	座長：大島伸一／アドバイザー／次世代チーム
第16回 9月20日(金)	第4回「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」【ウインクあいち大ホール830名参加】	
第17回 10月11日(金)	長生きを喜べるまちづくりシンポジウムの反省会	
第18回 11月 8日(金)	次世代チームで今後の研究テーマを考える	
第19回 12月13日(金)	今後の研究テーマの検討	
2020年		
第20回 1月10日(金)	講演1「認知症施策の現状と課題」 講演2「疫学を中心としたご講演」	植羅哲也 愛知県福祉局 介護推進監 高齢福祉課 地域包括ケア・認知症対策室 長谷川敏彦 一般社団法人未来医療研究機構 代表理事
第21回 2月 7日(金)	南医療生協の事例	西岡麻知子 南医療生協地域ささえあいセンター 部長 兼 リハビリテーション部長
第22回 6月 5日(金)	認知症の予防と共生：20年後・40年後の社会を考える	櫻井 孝 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター もの忘れセンター長
第23回 7月16日(木)	次世代チーム討議会	次世代チーム報告
第24回 8月 7日(金)	1. 次世代ミーティング報告(7月29日開催)／2. 次回まちづくり研究会開催について／3. 今後の研究会の進め方について	次世代チーム報告
第25回 9月25日(金)	8月研究会の「コロナにより従来考えていた未来が少し早く訪れたのではないかという仮説」について各フィールドでの状況を具体的に検証	次世代チーム報告
第26回 11月12日(木)	次世代ミーティング	次世代チーム報告
2021年		
第27回 1月 8日(金)	社会活躍度・グラフ提案	次世代チーム報告
第28回 2月12日(金)	長生きを喜ぶうえでの課題	次世代チーム報告
第29回 3月19日(金)	一生のステージ設定と長生きを喜ぶための要素	次世代チーム報告
第30回 4月16日(金)	テーマにおける2040年に変化すること・変化しないこと	次世代チーム報告
第31回 5月21日(金)	1. いきがい・やりがい・居場所・役割／2. 2040年の第3ステージにおいて長生きを喜ぶためのフレームワークⅡ(働く・お金編)	次世代チーム報告
第32回 6月18日(金)	これまでの研究の成果：1. 介護労働総動員制度／2. 世代間たすけあい講／3. パラレルキャリア促進制度／4. おせっかいさん育成事業	次世代チーム報告
第33回 7月 9日(金)	これまでの研究の成果報告(上半期)	次世代チーム報告
第34回 8月20日(金)	1. 次世代が描く2040のビジョン／2. ビジョン実現のためのキーとなる取り組み	次世代チーム報告
第35回 9月24日(金)	今後の進め方について・スケジュール・冊子構成	次世代チーム報告
第36回 10月15日(金)	目指す姿とそのための取り組み	次世代チーム報告
第37回 11月19日(金)	目指す姿の整理	次世代チーム報告
第38回 12月17日(金)	下半期研究報告	
2022年		
第39回 1月21日(金)	3年間の研究報告	次世代チーム報告
第40回 2月18日(金)	研究報告 メンバーの視点報告	次世代チーム報告
第41回 3月25日(金)	3年間の報告 意見交換	次世代チーム報告・アドバイザー／オブザーバー意見交換
第42回 5月13日(金)	研究会メンバー ディスカッション	次世代チーム報告
第43回 6月 10日(金)	次世代チーム報告まとめ／次期研究会を考える	次世代チーム報告
第44回 7月29日(金)	シンポジウムタイトル骨格構成の決定	次世代チーム報告
第45回 8月26日(金)	シンポジウム組み立て	次世代チーム報告
第46回 9月11日(日)	次世代対面討議	次世代チーム報告
第47回 10月 2日(日)	第5回「長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」【日本ガイシフォーラム 500名参加】	
2023年		
第48回 8月25日(金)	認知症になつても幸せか～テーマ設定と議論の方向整理	次世代チーム報告
第49回 10月27日(金)	どのような条件があれば満足できるか	次世代チーム報告
第50回 12月22日(金)	迷惑がかかるとはどのようなことか	次世代チーム報告
2024年		
第51回 3月 1日(金)	認知症フレンドリーな社会のあり方について	次世代チーム報告

※役職は実施当時／敬称略

愛知県地域再生 まちづくり研究会

愛知県における長生きを喜べるまちづくりとは何か



公益財団法人
杉浦記念財団

[発行日] 2025年12月

[発行者] 公益財団法人杉浦記念財団

〒474-0011 愛知県大府市横根町新江62番地の1
Tel : 0562-45-2731(代) E-mail : info@sugi-zaidan.jp
URL : <https://sugi-zaidan.jp>

詳しくはこちらからも
ご覧いただけます。

